

## 下東艶子

目的 家庭生活が家から船上に移った場合、どんな問題が生じるだろうか、家族関係に衣、食、住生活に、育児等に起きて来る諸問題を、船上生活をする主婦はどのように解決しながら家庭生活を経営するだろうか。私は似島の実態を調査し検討を試みた。

方法 民俗学的聴取法によつて、人脉を辿りながら本調査の研究を進めた。昨年2月から広島市似島の住民の生活について調査を続行して来た。似島は旧広島市街から、船で20分の近距離に所在しながら、伝統的風俗、習慣を維持し、僻地の如き過疎化なく独自の文化と生活様式を維持する。それを支える社会力は家族生活の中に蓄蔵されているようだ。海岸まで山が迫り、周囲16km、人口2700人という小島は生業を海上に求めさせ、現在、島民の8割は海運業に従事し、砂利採取、運搬の仕事で東北地方から鹿児島県まで、全国にまたがり活躍し、200隻の船の船主、船長、船員として活動しているが、島の若人等は多くの場合、結婚すると妻と共に船上生活をする。せまい船内で、日常、洗濯、掃除、裁縫、食事の準備等家事労働をし、子供が生まれると育児しながら、乗組員の世話や砂利採取の家業の手伝いをし、また買い出しや金策や外交に出かける。子供が離せるようになると、家の姑や里の母に預けるが、就学期に入ると船から家に戻り、船と家と半々の生活をする。やがて、姑と家事を交替し、夫のるすを守りながら子供の教育に専念する。

結果 変則的な船上生活を一時過すその間に家庭経済の大きな基盤を築き、余裕を作り、子女の教育は、島の伝統の島内結婚や直系家族によつて、島ぐるみで援護され、非行も無く、人情味豊かな、心身ともに健全な次代の育成が行なわれると言つても過言ではない。